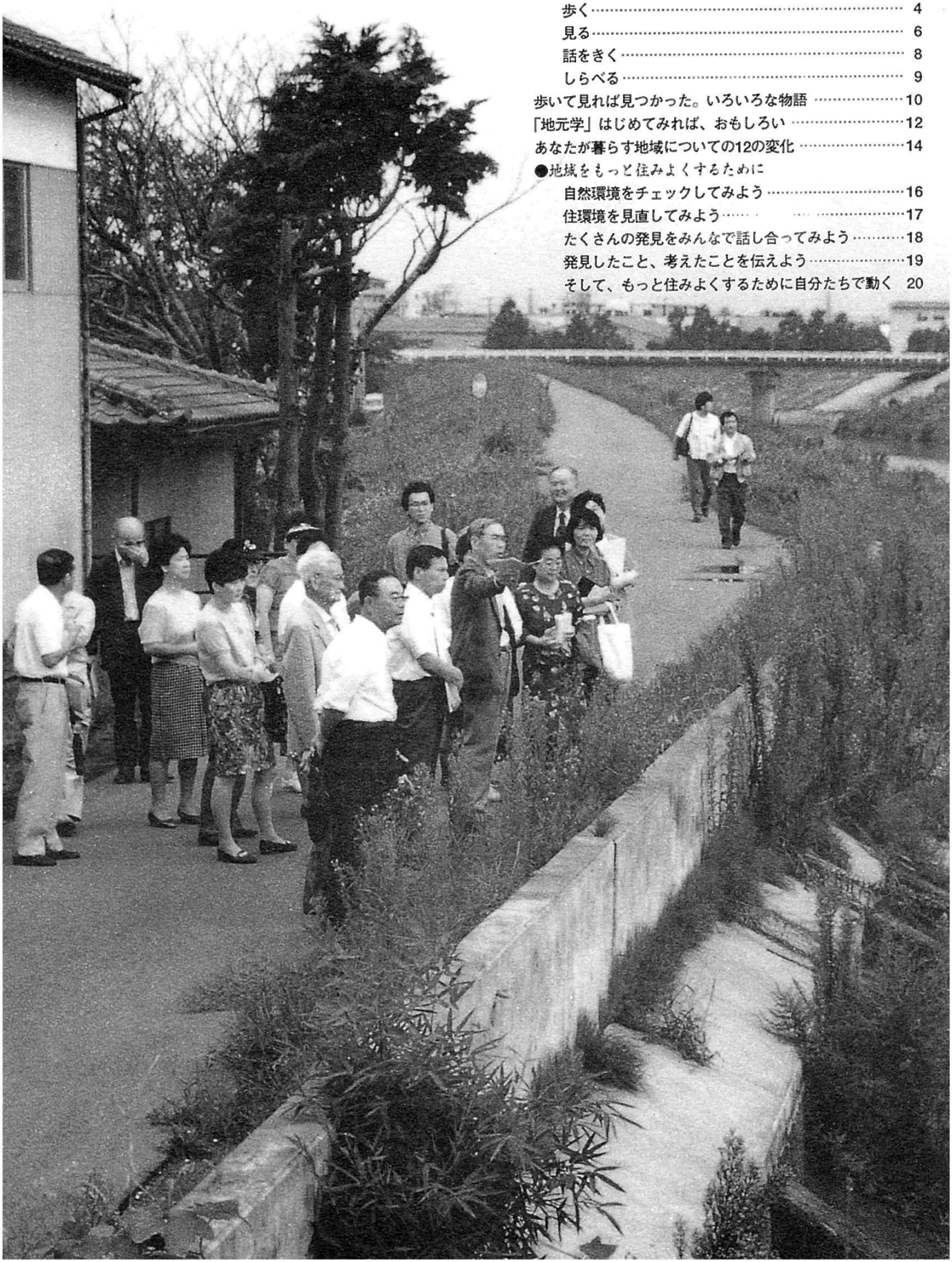
マニュアル

「地元学」

地域をもっと知るために

地域をもっと住みよくするために



もくじ

あなたが暮らす地域についての12の質問 …… 2

●地域をもっと知るために

歩く …… 4

見る …… 6

話をきく …… 8

しらべる …… 9

歩いて見れば見つかった。いろいろな物語 …… 10

「地元学」はじめてみれば、おもしろい …… 12

あなたが暮らす地域についての12の変化 …… 14

●地域をもっと住みよくするために

自然環境をチェックしてみよう …… 16

住環境を見直してみよう …… 17

たくさんの発見をみんなで話し合ってみよう …… 18

発見したこと、考えたことを伝えよう …… 19

そして、もっと住みよくするために自分たちで動く 20

自分のまちがおもしろい。

毎日過ごしているじぶんのまちなのに、
たとえば20年前どんなところだったかを、知らない。
近所の人とゆっくりおしゃべりしたことが、ない。
みんな、少し忙し過ぎるからなのかな。
でも、この頃、新しいものより古いもの、
遠くのことより身近なことが、大切に思えてきた。
このまちのことをもっと知りたいと思う。

知っている人に話を聞きたいと思う。
まず歩いてみよう。
思いきって、昔を知るあの人に声をかけてみよう。
いっしょに歩く仲間をみつけよう。
そうすれば、きっとこのまちが好きになるはずだ。
もっと、いいまちにしようと思うはずだ。
「地元学」は、自分の暮らすまちのものがたりを探すこと。
そして、まちの新しいものがたりを、みんなでつくり上げること。

▶福田町・田子での「地元学講座」。まずみんなで七北田川のほとりをゆっくり歩いた。

あなたが暮らす地域についての12の質問

あなたの身近な地域について、いくつ答えられるでしょうか。

1 あなたが暮らす地域では、どんな生きものを見かけますか？

2 あなたの近所で、一番大きな木はどこにありますか？　それは何の木ですか？

3 あなたの家の近くに、井戸はありますか？

4 あなたの家から一番近い田んぼはどこにありますか？

5 あなたの家の近くで最近新築された建物はありますか？

前はどんな建物だったか覚えていますか？

6 あなたの近所の子どもたちは、どこの小学校に通っていますか？

7 あなたの近所の一番のお年寄りは、どの家に住んでいますか？

8 あなたの家の近くで、最近、赤ちゃんはどの家で生まれましたか？

9 あなたの近所に暮らす人の名前を知っているだけ上げてみてください。

10 万が一の火事や地震のとき、あなたの家族の避難場所はどこですか？

11 あなたの地域のお祭りはいつですか？

12 あなたの暮らす地域で、あなたが一番好きな所はどこですか？

身近な地域をもっと知ろうとすること。それが「地元学」です。

2～3ページ、および14～15ページの質問は『地球にやさしい環境生活2・住のエコロジー』（日本放送出版協会1993）の「環境についての33の質問」を参考に、作成しました。

歩く

最近、近所をゆっくり歩いたことがありますか。毎日、会社と家の往復だけだったり、歩いても決まった店までの急ぎ足だったり、車で通るだけだったり…。いつも通る道以外のところを、ぶらぶらのんびり歩くことは以外に少ないものです。

まず、歩いてみましょう。そして、大きい木に気づいたら立ちどまり、小さな祠（ほこら）を見つけたらながめて見ましょう。鳥のさえずりが聞こえたら、見上げ、畑があったら何を植えているのかのぞき込んでみましょう。

どんな自然がどんなところに残っているのか、どんな人がどんな暮らしを送っているのか。それをどんどん発見するつもりで歩いてみると、身近な地域が少しずつ見えてきます。しかも、これがなかなか楽しい。いっしょに歩く人がいればなおさらです。

「地域に身を乗り出してみる」、これが「地元学」の基本精神。

▼七北田川沿い。受講生同士でおしゃべりしながらまず歩いてみた。

【こんな歩き方をしてみよう】

●ゆっくり、発見するつもりで歩く

急ぎ足では風景は語りかけてはくれません。歩くときはゆったり、のんびりが基本。いわば牛が歩くような速さで。木を見るときは木の種類を調べるつもりで、面白い建物があるときは写真に納めながら、じっくりと歩き込みましょう。

●疑問を持ちながら歩く

「どうしてこの道は曲がっているのかしら?」「どうしてここに大木があるのかしら?」。歩くときは、そんな素朴な「?」を持ちましょう。そして、あまり難しく考えず、子どものように小さなことを面白がりながら、好奇心を持って。

●グループをつくる

関心や興味の持ち方で、同じ風景を見ても気がつくところがずいぶん違ってくるものです。視点が多いほど、発見も増えてきます。自然の好きな人、歴史の好きな人、いろんな人を誘い、関心の目を増やして歩いてみましょう。

●地図で情報を得る

以外に知らないのが身近な地域。2万5千分の1、1万分の1の地形図をながめ、歩きたい地域とそのまわりがどんなようすなのか、あらかじめ予備知識として頭に入れておくと、地域全体の見え方が違ってきます。

◉歩くとき持って行きたいもの◉

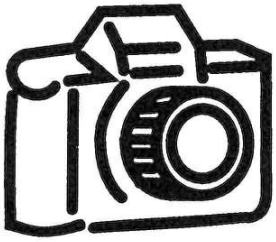
地図

3000分の1くらいの縮尺の地図（たとえば『住宅地図』や『仙台市文化財分布地図』）があると、気になるところ、面白いところなど興味を持ったポイントを、直接地図に書き込んでいくことができます。

メモ

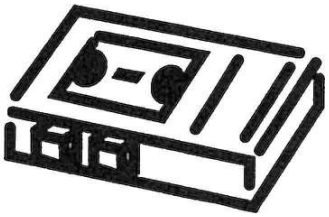
何にぶつかるかわからないのが、地域歩きの面白さ。自分の気持ちの動く場所や人にぶつかったら、すぐにメモを。

カメラ



カメラもメモがわりにフル活用。文章では記録の難しいことでも、写真1枚で説明できることがある。パシャパシャ気軽に撮りましょう。

テープレコーダー



地域の人に取材に伺うときは必携。いつも持ち歩いていると、たまたま出会った人の話をとったり、鳥のさえずりをとったり、いろいろに活用できます。

見る

人それぞれ関心の領域が違えば、歩いていても気がつくところはいろいろのはず。たとえば、花の好きな人は、道端の草花や塀の向こうの庭木に目がいくでしょう。「歩くのはいいけど、どこを見ればいいの？」と戸惑う人に教えたい、地域を歩くときのポイント。

●地形

まちの土台といえるのが地形です。車では気づかないのに、自転車だと感じるゆるやかな坂。住宅が建ち並ぶ平らな土地…。地形に敏感になって、一度、建物や道路を取り去ったまちのようすを想像してみましょう。山を削り、沢を埋める今と違って、昔の暮らしは地形に則して成り立っていたことがよくわかります。

●道

国道やバイパスではなく、昔から地域の人が使っていた道をさがしてみましょう。車にはちょっと狭い道、曲がりくねった道、それはきっと古い道のはずです。家と家との間を抜ける近道や、行き止まりの路地にも、暮らしは息づいています。

●水辺

昔は、川、堀、沼、井戸などの水辺はどこも生活との接点。川から引かれた水は堀を流れて田んぼを潤したし、丘陵地にはため池もたくさんありました。そして、屋敷には必ず井戸があったものです。少なくなったとはいえ、今もその名残はあちらこちらにあ

▼遠くからでも目立つ大木。古くから人々に親しまれてきた木。

▼小さな細い道は、地域の人にはなじみ深い生活道路。

って、かつての生活を伝えてくれます。

●樹木

遠くからでも目を引くような大木。それは屋敷林の名残かもしれません。また、立派に育った並木は、まちを少しでも緑豊かにしようとした人たちの気持ちでもあるでしょう。200年、300年と人よりもはるかに長く生き続ける樹木は、地域の歴史の証人と言えるものです。

●生きもの

草花があるところには、蝶などの虫が集まり、鳥が飛んできます。そして、草花や樹木や動物は「あぁ、気持ちがいい」と心をなごませるもの。それはきっとまちの住みよさを左右しています。そんな場所はあるでしょうか。どこに、どんな姿であるでしょうか。

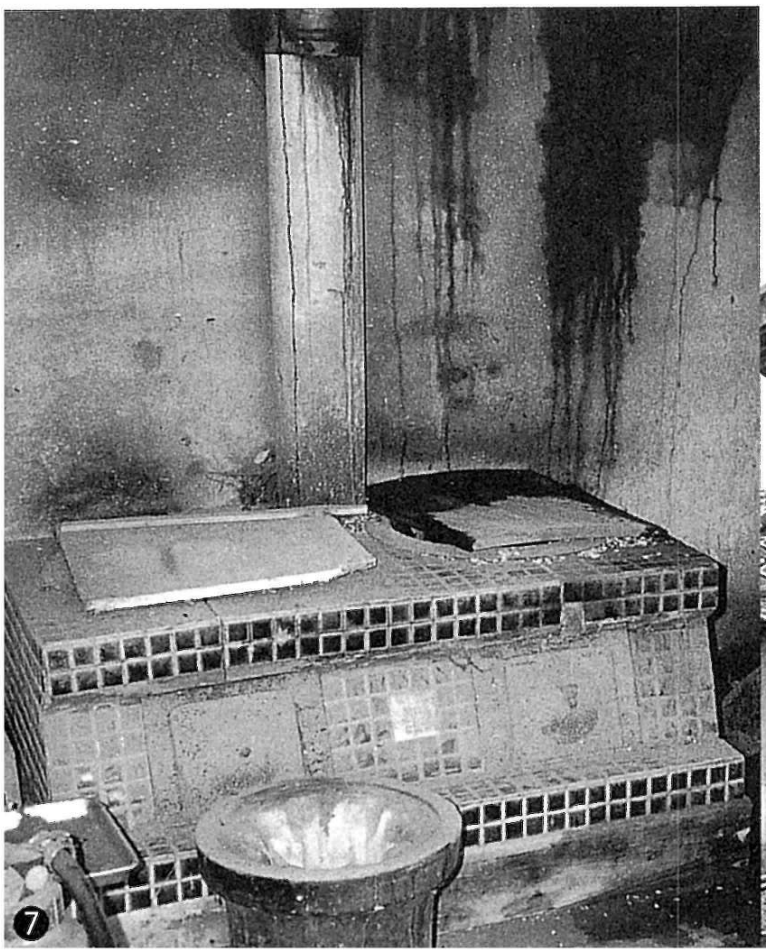
●建物

神社や小学校は、生活と密接に結びついてきたところ。かつては地域の心のよりどころだったはずです。そして、建物は一般の住宅が多いのか、アパートが多いのか、古いのか新しいのかをウォッチングしてみましょう。よく見れば、暮らしの変化が読み取れます。

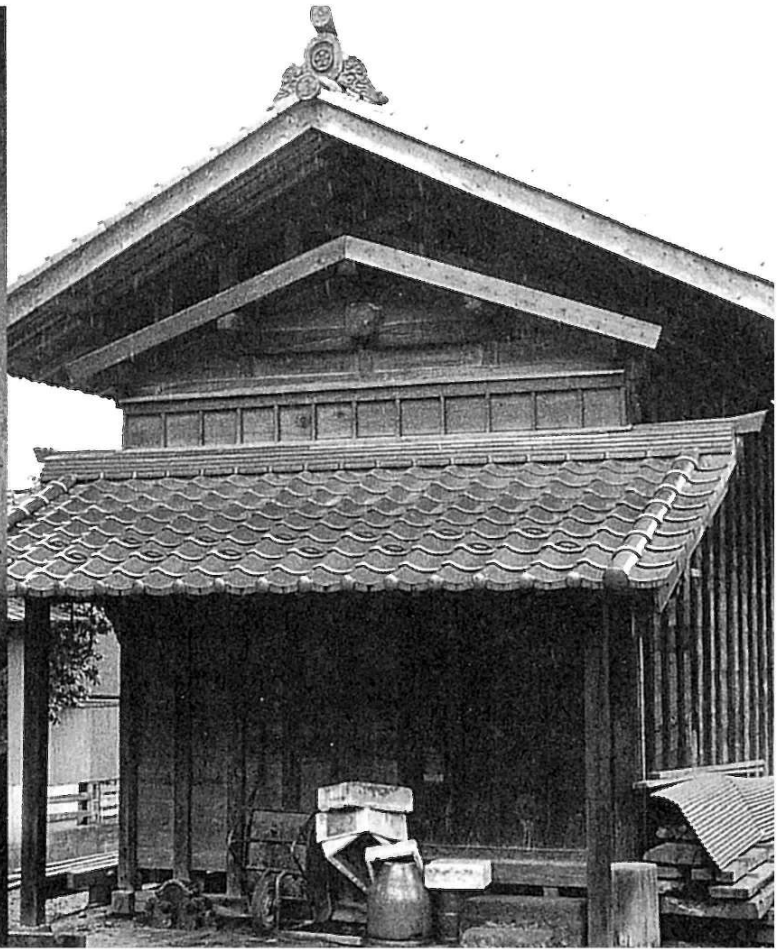
●暮らし

魚屋さん、八百屋さん、豆腐屋さん、自転車屋さん…生活に欠かせないそんな店は元気で営業しているでしょうか。それともコンビニエンスストアだけになっているでしょうか。買物しているのは若い人でしょうか、年配の人でしょうか。注意すれば、地域の生活ぶりがわかります。そして、地域のことをよく知る人がだれかも、少しずつ見えてきます。

▼大都市仙台でも、丹念に歩けば、こんなかまどが見つかることも。



▼農家の庭先には木蔵（きぐら）が残っていた。



地域をもっと知るために

話をきく

そのまちでどんな暮らしが営まれてきたのか。それを知るには、まちの昔を知る人に話をきくのが一番。これまでの暮らしの事、小さな出来事、いろんなことを聞いてみましょう。生活はそんな小さな事の積み重ねなのだから。

●お年寄りにきく

30年、40年と暮らしてきた人といえば、おじいさんやおばあさん。近所の顔見知りの人に思い切って「昔の話をきかせてください」と声をかけてみましょう。「何にもわからないから」という答えが返ってくるかもしれませんが、そのときは「昔は田んぼが多かったんでしょうね」「お祭りはいつでしたか」など、具体的にたずねてみること。親しくなれば、なつかしがっていろいろ話してくれるはずです。

●農家をたずねる

仙台の市街地周辺は住宅になる前は、多くは田んぼや畑でした。近所にまだ農家があるなら、話をきいてみましょう。昔から変わらない場所で田や畑を守ってきたのが農家。代々住み続けてきているだけに、まちの変化もよく知っているはずです。

●お店で情報をとる

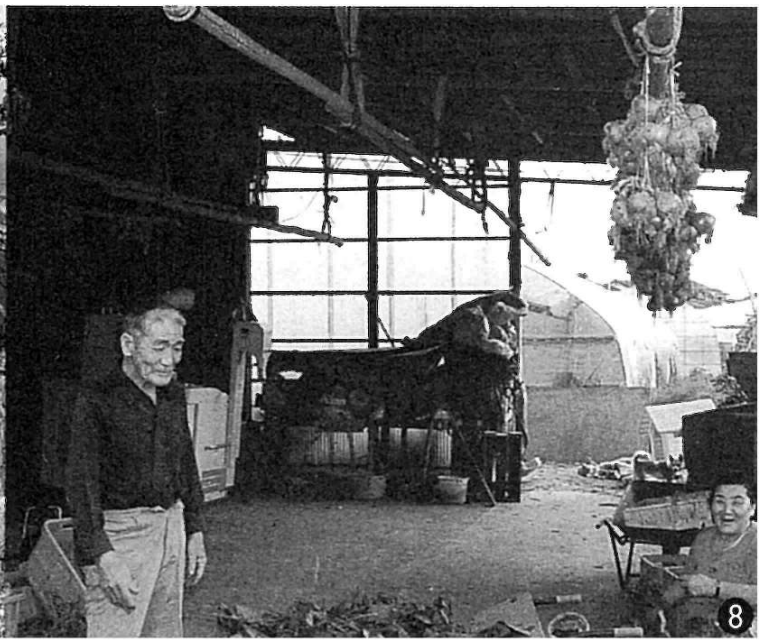
地域の人が利用するお店のご主人は、いろんな人の情報を持っているものです。米屋さん、たばこ屋さん、酒屋さんなどのように、長くそこで商売を続けてきた店ならなおさら。まずはお客さんになって、通ってみましょう。はじめはちょっとした立ち話から。もちろん商売の邪魔にならないように。

●神社やお寺をたずねる

神社やお寺の多くは、昔からその場所を変わっていません。ぜひ、たずねてみましょう。また神社のお祭りは地域に暮らす氏子の人たちがかかわっているので、その人たちに話を聞いてみてもよさそう。

▼井戸を大切に守り、暮らしに生かしている人もいる。

▼手を動かしながら、いろいろ教えてくれる農家のご夫婦。



【地域をもっと知るために】

しらべる

歩いたり話を聞いて、疑問が出てきたら、資料に当たってみるのも大切なこと。図書館などで、資料を探してみましょう。

●図書館や資料館に行く

地域の昔のことを、資料の上でちゃんと確認しておけば、歩いても少し違う見方ができそう。まず出かけてみましょう。そのときはどのまちのいつ頃のことを知りたいのか、自分なりに目的をはっきりさせて行くこと。わからないときは司書の人や学芸員にたずねてみます。

●地図をくらべる

文献は読むのが苦労でも、地図なら地域の変化が一目でわかります。地域が大きく変化したのは戦後、昭和30年代以降のこと。たとえば、2万5千分の1の地形図を発行された順に見ていくと、その時代、どれほど急激にまちが変わったかがわかるものです。藩政時代などの地図をさがしてさらに昔へさかのぼれば、地域をもっと想像力豊かにながめることができるでしょう。

●写真をさがす

地域に昔のまち並みを撮影していた人はいないでしょうか。資料館などでも当たって、見つかったなら、いまのまちとくらべてみましょう。驚くほど変化したのがわかります。そして、解体が間近な古い建物などは、今のうちに写真撮影を。5年後10年後、きっと資料として役に立つことがあるはずです。

■仙台の歴史や郷土資料について調べられるところ

仙台市博物館　情報資料センター
青葉区川内三の丸跡　☎225-3074

仙台市歴史民俗史料館
宮城野区五輪1-3-7　☎295-3956

仙台市戦災復興記念館　資料展示室
青葉区大町2-12-1　☎263-6931

仙台市民図書館　郷土資料室
青葉区桜ヶ丘公園3-1　261-1585

宮城県立図書館　平成10年3月下旬開館予定
泉区紫山1-1　☎未定

▼史跡の説明もじっくり読み込もう。写真を撮ってもいい。

▼古くからの地名を説明する辻標が、市内にはいくつも建っている。

【地域をもっと知るために】

歩いてみれば見つかった。いろいろな物語。

想像するのと実際に歩いてみるのとでは大違い。足を使い、いろんな話を聞き、確かめていくと、たくさんの物語が見つかるものです。一本の木、一筋の水路、それは地域の生活を伝えてくれるし、これからの地域づくりのヒントにもなります。数年間の「地元学講座」の中から、そんな発見をいくつか。

公園の樹木を数えたら、一本一本が見えてきた

●榴岡公園の樹木は全部で２７０１本

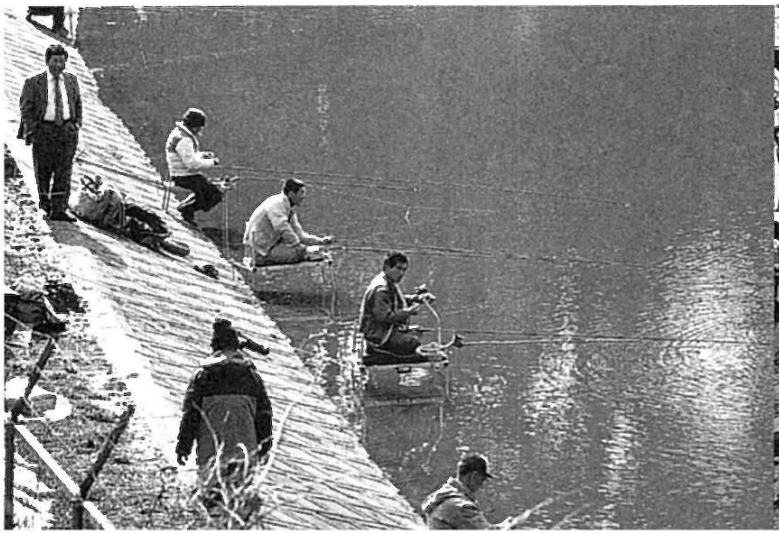
春にはたくさんの花見客でにぎわう榴岡公園。１年目の「地元学講座」では、この公園内の木を数えてみました。結果は１１５種類、２７０１本。１６９５年に伊達綱村が京都から取り寄せた１０００本の桜を植えて３００年。文化年間の大火、明治時代の歩兵第４連隊の設置、大正時代の国の名勝指定、そして、仙台市の公園整備、その結果として残った樹木たちです。昭和３年、昭和天皇の即位を記念して植えられた桜や、第４連隊の石原大佐が食糧補給のために植えた梅、結実しないために地元の人から「実なしサイカチ」と呼ばれるサイカチなど、記念の木やいわれのある木もたくさん見つかりました。

沼は地域の生活を支えた生命線だった

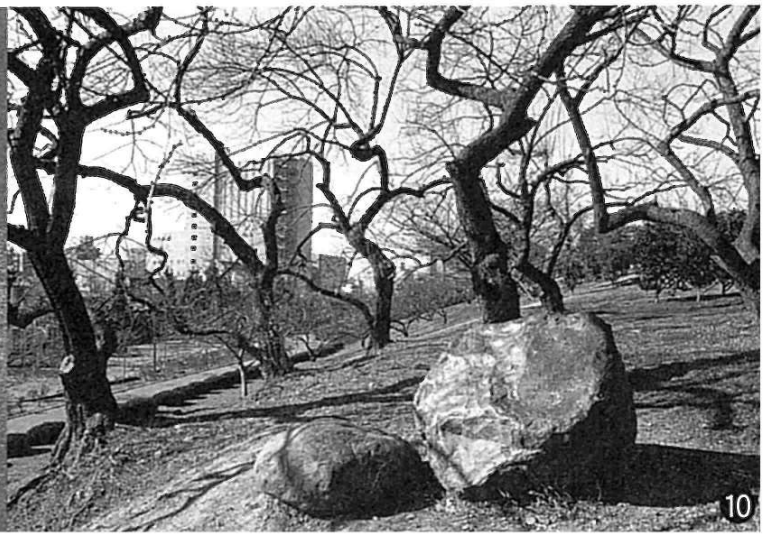
●与兵衛沼は仙台北東部の水田をうるおした

二の森付近にある与兵衛沼は、豊かな自然を保ち今も地域の人に親しまれています。歴史を知る人に尋ねると、寛文年間、鈴木与兵衛という人が私財を投じて造ったことがわかりました。小田原、燕沢、苦竹、新田、高砂地区の灌漑用水でした。沼のそばにある碑のひとつは、その１００年後、土地の農民が与兵衛への感謝を込めて建てたものです。その後、

▼与兵衛沼には、いつもたくさんの釣り人が集まる。



▼記念碑を読むと、樹木のいわれがわかる。



沼は原町小学校の水泳場として使われたり、冬場はスケート場にもなりました。今は、ヘラブナ愛好者でつくる与兵衛会が沼の周辺を見守っています。住宅地の中のオアシスのように残る沼は、生活を成り立たせていくために、なくてはならない沼だったのです。

地名に残る「野」の広がりと豊かさを実感した

●宮城野原は天国のような遊び場

現在の宮城野球場から陸上自衛隊仙台駐屯地あたりは、かつては「宮城野」と呼ばれた広大な野原。花が咲き乱れる野は平安の頃から歌によまれ、近代以降は軍の練兵場でもあったところです。そして、子供たちにとっては思い出深い遊び場でもありました。兵隊ごっこ、野球大会、凧上げ、餅草つみ…そんな遊びを日が暮れるまで楽しみました。大正時代から昭和にかけて、ものめずらしい飛行機をワイワイ騒ぎながら見上げたのもここでした。市内の連合運動会では隊伍を組んで堂々行進もしました。広大な「野」の風景は、そんな経験を持つ人の脳裏に今も深く刻み込まれていました。

街道のにぎわいを思い起こさせる菓子を求めて

●幻の名物菓子「今市おこし」の再現

江戸時代の文献にも残され、旅の人たちに人気だったという「今市おこし」。今、その菓子を知る人はほとんどいません。その謎を追いました。いろいろな人に声がけしているうち、「今市おこし」をつくっていたとされるお宅を発見。そこで、おこし製造の作業台と思われるものを見せてもらいました。ご主人は「今市おこし」は見たことも食べたこともないということですが、昭和43年頃まで正月には水飴を造り、飴餅を食べたといいます。それを手がかりに糒（ほしい）や麦芽などの材料を求めて試作。何度か試作をくり返し、講座参加者全員で味わいました。幻の菓子は、今市のにぎわいを思い起こさせてくれるものとなりました。

▼おこしづくり。まず糒を炒り、水飴をつくってからめた。

▼「宮城野」の講座では、まず国分尼寺を訪ねた。

「地元学」はじめてみれば、おもしろい。

最初はとまどっていた「地元学講座」の受講者も、自分たちで歩きはじめると、その楽しさにどんどん夢中になります。そして、わずか半年後の講座の終わる頃には、地域に大きな関心や愛情を抱きます。中には、毎年欠かさず参加したり、参加者同士で会をつくり、地域を歩く人たちも現れ始めました。

通り過ぎるだけだったまちが、いまは気になります

宮城野区幸町　高梨輝恵子さん

「地元学講座」には続けて3年参加しました。実際に歩くようになってから、通り過ぎるだけだったまちの歴史や暮らす人がよく見えてきました。たとえばお宅に伺っても都心と周辺部はずいぶん違う。あいさつの仕方も私たちの迎え入れ方も。歩いてから4年、5年と経つまちもあり、まち並みが変わったのを見るにつけ、「お話を聞いたあのおばあちゃんはお元気かしら」と気になります。あらためて歩きたいと思いますね。こういう講座やワークショップが増えていけば地域にも市民の声を生かした公園や建物がつくれるのではないでしょうか。

「受講するたび、気になる町が増えてきた」という高梨さん。（手前）

いろいろな人との出会いが楽しい

宮城野区五輪　石崎その子さん

いろんなまちでいろんな人の話が聞ける、それが「地元学」の楽しさです。こういうきっかけがなかったら出会えない方たちばかりです。お年寄りの方たちは、昔の生活や地域のできごとなどを想い出し、楽しそうに話してくれます。お茶とお菓子で歓迎されて、帰りがけに畑の野菜までいただいたこともあります。取材で写真を撮って後で送ったら、とても喜んでもらえたこともありました。これもひとつの出会いですね。私は仙台生まれの仙台育ちですが、居住している地域を一歩離れると知らないことが多いと実感しています。

2年目から参加。メモを片手に地域の人の話を聞くのが楽しみ。

「地元学」の財産はいい仲間との出会いと触れ合い

宮城野区燕沢　門脇誠一さん

最初はカルチャーセンターみたいなものだと思っていたから、「自分で調べるんですよ」といわれてびっくり。戸惑いもあったし、やり方もわからなかったけど、今では地域の人を探し当て、あれこれ話を聞くのが本当に楽しみになりました。毎年講座の始まる秋が待ち遠しい。「地元学」のいいところは茶飲み話に出てくるようなことが話題であること。何年も参加するうち知り合いがたくさんでき、付き合いが広がってきました。調べる中で資料が見つかったりすることも収穫ですが、それは付属品で、仲間とのコミュニケーションが一番の財産だと思います。講座から独自に活動する会も生まれて、地元への愛着がますます深まってきました。

2年目から「地元学講座」に欠かさず参加してきた。（帽子姿）

会社から地域へ、退職後、関心の目が移りました

青葉区桜ヶ丘　児玉昭治さん

3年前に退職し、「地元学」などの地域活動に参加するようになりました。それまでの生活は仕事が中心で「公」が95パーセント、「私」はわずかに5パーセントぐらい。いまはそれが逆転して、地域や自然への関心がどんどんふくらんでいます。実は私は長くゼネコン勤務で開発をする側だったのですが、家の近くの水の森をはじめ梅田川、岩切など地域をじっくり歩くようになって、こういう小さな自然を市民の力で守っていくのが本当だと思うようになりました。会社は男社会で年功序列、一方地域は女性が多くて年代もばらばら、初めは発言の仕方もわからずとまどいましたが、たくさんの仲間ができ、つき合いも実に楽しい。地域を知るだけでなく、もっとよくするためにこれからひと頑張りしてみたいです。

「まちづくりには行政、業者、市民が欠かせないけど、専門的な知識を持ち市民の声を集めて発信するもうひとつの存在をつくっていけないかと思う」と話す児玉さん。（左）

あなたが暮らす地域についての12の変化

あなたの身近な地域、こんな変化は起きていませんか？

1 虫の音や鳥のさえずりがあまり聞こえなくなった。

2 夜、星が見えにくくなった。

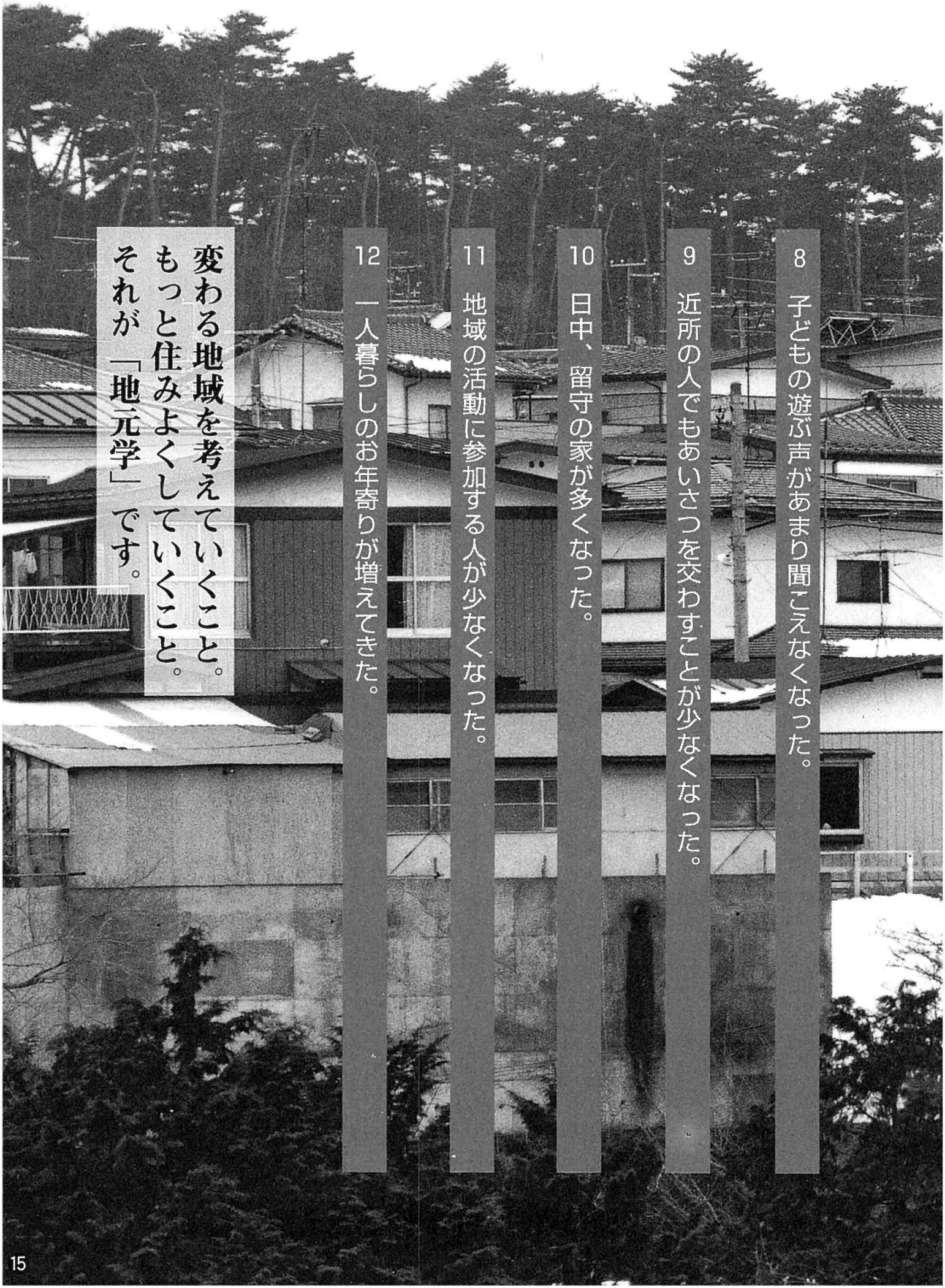
3 田んぼや畑がなくなった。

4 空き地にゴミが捨てられるようになった。

5 アパートやマンションが増えてきた。

6 八百屋、魚屋、豆腐屋などがなくなって、コンビニエンスストアが増えてきた。

7 家が取り壊され、駐車場になった。



8　子どもの遊ぶ声があまり聞こえなくなった。

9　近所の人でもあいさつを交わすことが少なくなった。

10　日中、留守の家が多くなった。

11　地域の活動に参加する人が少なくなった。

12　一人暮らしのお年寄りが増えてきた。

変わる地域を考えていくこと。
もっと住みよくしていくこと。
それが「地元学」です。

自然環境をチェックしてみよう

近頃、気になるのが自然。樹木の緑や道端の草花、鳥のさえずり、水の流れ…。車やビルなど人工的なものにばかり囲まれていると、ますますその大切さを実感することが多いようです。あなたの暮らす地域の木や川は大丈夫ですか？

●地域の大木をさがす

近所に大きな木はありますか。豊かに葉を茂らせる大木は、それだけで住む人に安らぎや落ち着きを与えてくれるもの。公園や神社をまわってみましょう。また、個人宅にあったら、その人に話を聞いてみましょう。大木を切らずに守るには、きっと人知れずいろいろな苦労があるはずです。1本の木をめぐる物語も聞けることでしょう。そこから、木を守っていくための糸口が見つかるかもしれません。

●身近な生きものを調べてみる

虫や鳥、魚などの動物は、自然環境の健全さを知る手がかり。何人かでチームをつくって、どんな種類の生きものがやってくるのかを調べてみましょう。最初は身近な庭や公園からスタート。子供も大人もいっしょに取り組んでもいいでしょう。何年か続ければ、その動向で環境変化がつかめるはずです。

●川のゴミを調べてみる

川や堀など、水の流れるところで目につくのがゴミ。清掃をかねて、どんなところにどんなゴミが捨てられているかを調べてみましょう。ゴミは下流へと流れ、海を汚します。また、せっかくの美しい風景を台無しにします。そして、鳥などの生きものにも大きな害を及ぼします。ゴミの種類がわかることで、私たちの生活が環境に及ぼす影響がどれほどのものか、見えてきそうです。

▼団地近くの沼にも白鳥が来る。

▼大木は御神木であることが多い。

地域をもっと住みよくするために

住環境を見直してみよう

地域の「住みよさ」って何だろう。考えたことはありますか？　「何だか静かじゃなくなった」「交通量が増えてきた」…毎日の暮らしの中で、ちょっと気になることがあったら、みんなで出し合ってチェックしてみましょう。

●歩きにくいところ、危険な道をチェックする

例えば、お年寄りが、ちょっとそこまで買い物に行くのに安心して出かけられるだろうか、そんな視点でまちを見渡してみましょう。歩道と車道の段差の大きいところ。急な階段。雪が降るとすべりやすい坂。信号のない道路。意外に危険なところがあちこち見つかるのではないでしょうか。

●交通量を調べてみる

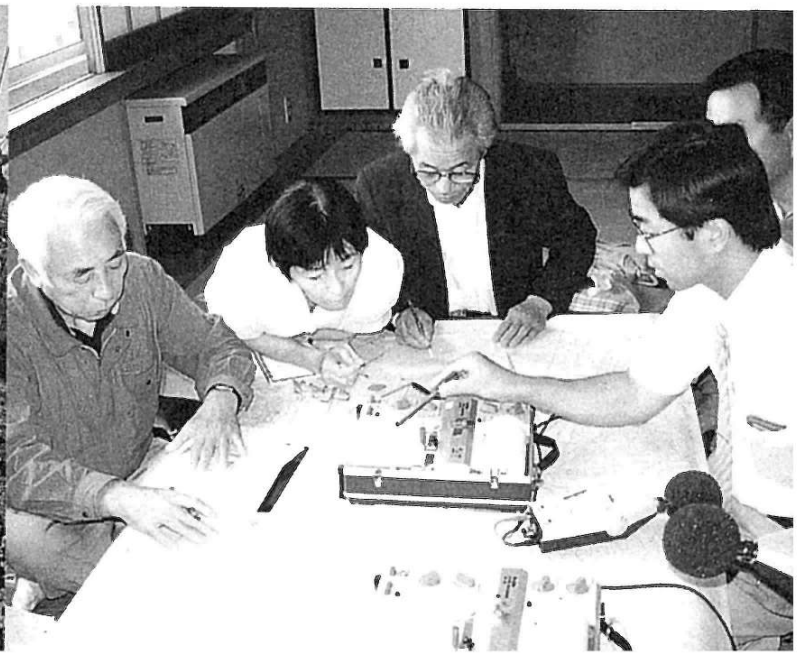
車は便利なもの。でも増え過ぎるといろいろな弊害を引き起こします。騒音、大気汚染、交通事故など、地域の住みよさに直接、悪影響を及ぼしてきます。身近なところの交通量をチェックしてみましょう。時間帯でずいぶんの差、危ない場所がよく見えてきそうです。子供たちといっしょにやれば、交通安全を考えるきっかけになるでしょう。

●好きな場所、気持ちのいいところをリストアップする

歩いてみて、好きな場所や気持ちのいいところはどのくらいありましたか。みんなで出し合ってリストにしてみましょう。みんなが共通していいと思うところもあるでしょう。地図をつくってみてもいいでしょう。そんな場所がどのくらいあるか、それによって地域の住みよさが違ってきそうです。

▼みんなで歩くと「ここはいいね」というところが見つかる。

▼「岩切」での「地元学講座」では、騒音調査のため機器を使った。



たくさんの発見をみんなで話し合ってみよう

歩いたり調べたりすると見えてくる、自分の暮らすまち。いろいろ発見したことをもとに、何が大切か、何を残したいかを、みんなで話し合ったり考えたりしてみませんか。

●地域のいいところ、直したいところをあげてみる

例えば、春、近所の人たちが楽しみに眺める桜の並木はいつまでも残したいし、お母さんと子供たちが集まる公園はいつも安心できる所にしたい。反対に歩くのに危険な道は改善したいし、ゴミの捨てられるところはなくしたい。そんなふうに、みんなで発見したものを検討してみましょう。

●古くからあるいいものを、これからに生かす

例えば、地域のお祭り。新しい趣向を加えてみれば、もっといろんな人が集まる楽しい祭りになるかもしれません。また、顔見知りの人同士が交わす「こんにちは」というあいさつ。こんな習慣が少しずつ広がれば、もっとなごやかなまちになるでしょう。見えるものでも、見えないものでも、古くからあるものでこれからに生かせるものはたくさんあるはず。

●人間関係のネットワークをひろげよう

「地元学」をやってみようと集まった2、3人の仲間。そうした気持ちを持っている人たちは、地域の中にもっといるはずです。お母さん同士のネットワーク、仕事を退いた年配の男性のネットワーク。いろんな人に声をかけて仲間を広げましょう。地域のことを「ああでもない」「こうでもない」と言い合うところから、まちはよくなっていくはずです。

▼子供たちと井戸を歩いてみる。ものめずらしさも先立って、みんなワイワイ。

▼講座で知り合った人同士がつながって、まず活動してみる。そんなグループも生まれている。

地域をもっと住みよくするために

発見したこと、考えたことを伝えよう

地域を歩いて気づいたことは、いろんな人に伝えたい。そのための小さな新聞をつくってみましょう。情報を発信すれば、きっと新しい情報が入ってくるはずです。仲間探しも呼びかけてみましょう。

●簡単な新聞をつくってみる

あまり難しく考えず、調べたり、考えたりしたことをもとに原稿を書いてみます。写真やイラスト（きっと得意な人がいるはず）を加えれば、より親しみやすくなります。手書きでもいいし、ワープロを使えば立派な新聞のできあがり。

●子供会や町内会の活動にも加わって

できあがった新聞はコピーをとって、友人や知人に配ってみましょう。また、子供会や町内会の活動をしている近所の人たちにも渡してみましょう。仲間に加わりたいと、声をかけてくれる人が現れるかもしれません。長く暮らし、地域を古くから知る人たちとのつき合いも生まれるのではないでしょうか。

●市民センターで情報発信

地域には、身近なところに市民センターがあります。ここに新聞をおけば、きっと関心のある人が読んでくれるはずです。また、定期的に集まりを持ち、新聞で地域の人に参加を呼びかけるのもいいかもしれません。活動にはずみがつきそうです。

▼「地元学講座」は毎年冊子づくりでしめくくり。原稿を受講生全員で書く。

そして、もっと住みよくするために、まず自分たちで動く

歩く中で発見した地域の魅力。そして、みんなで話し合う中で見えてきた課題。それを実際に住みよさに結びつけていくためには、具体的な行動が必要です。仲間同士、テーマを決めて取組んでみましょう。

●地域のことは、まず住む人が率先して実現していくとき

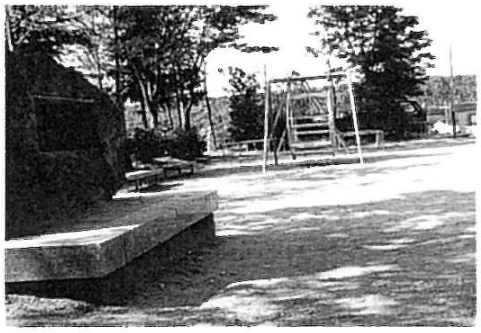
小さなことでも、それが積み重なって大きな住みよさとなります。そこに住む人でなければわからないこと、気づけないことがたくさんあるでしょう。

誰かを当てにするのではなく、まず自らで行動を起こすのがこれからの地域づくりです。何人かで取組めばきっといい知恵も浮かぶはず。いろいろな人と連携を取りながら、小さな活動を積み重ね、いいまちにしていきましょう。

●たとえば、こんなテーマに取組もう

関心のあること、そして気づいたこと。それを活動のテーマと定めて、みんなで取組んでみましょう。

- 地域のみんなにおすすめの「散歩コース」を考える。
- いろんな種類の樹木をたどって歩ける「樹木マップ」をつくる。
- 子供たちが安心して遊べる「遊び場マップ」をつくる。
- 近くの「川や堀の水質」を調べてみる。
- 地域の「酸性雨」を調べてみる。
- 20年前のまちのようすを、お年寄りに聞いてまとめてみる。
- 近所の人に声をかけて「まちの古い写真」を集めてみる。
- 近くの公園を「利用しやすくデザイン」してみる。
- 地域の祭りに「新しい趣向の店」を出してみる。
- 地域に残る井戸のマップをつくり「井戸の再利用」を考えてみる。
- 一人暮らしの「お年寄りを手助けするネットワーク」をつくる。



歩いてみれば、地域がもっと好きになる。

発行・企画編集　仙台市宮城野区役所
編集協力　(有)タス・デザイン室
連絡先　宮城野区役所まちづくり推進課
☎022－291－2111

●本文は再生紙を使用しております。